

第9期宇治市生涯学習審議会 会議録

名称	第9期宇治市生涯学習審議会 第3回審議会						
日時	令和元年10月31日(木)午後2時~4時10分						
場所	生涯学習センター 2階 一般研修室						
出席者	委員	×	内田 徹	○	佐藤 るり子	○	林 みその
		○	奥西 隆三	○	杉本 厚夫	○	藤林 弘
		×	木村 孝	○	永井 久敬	○	向山 ひろ子
		○	切明 友子	×	長積 仁	○	森川 知史
		○	桑原 千幸	○	中本 裕也	○	六嶋 由美子
		×	小宮山 恭子	○	西山 正一		
	事務局	○	伊賀 和彦(教育部長)				
		×	上道 貴志(教育部副部長)				
		○	市橋 公也(教育支援センター長)				
		○	福山 誠一(教育支援課長(兼)青少年指導センター所長)				
		○	久泉 昭人(生涯学習課長(兼)生涯学習センター所長)				
		○	宮本 義典(生涯学習課副課長(兼)生涯学習センター主幹)				
		○	深澤 博文(生涯学習課生涯スポーツ係長)				
		○	高橋 紀子(生涯学習課事業係長(兼)生涯学習センター主査)				
		○	上田 敦男(生涯学習課生涯学習係長)				
		○	森川 円(生涯学習課生涯学習係主任)				
		○	太田 悠(生涯学習課生涯学習係主任)				
傍聴者	2名						

会議要旨は、下記のとおりである。

・ 第2回審議会の会議録について

修正部分を確認し、ホームページで公開する。 委員了承

1. 報告事項

➤ 第61回全国社会教育研究大会(兵庫大会)について

(事務局)

第61回全国社会教育研究大会(兵庫大会)が10月23日(水)から10月25日(金)の3日間、神戸ポートピアホテル・ポートピアホールで開催され、当審議会は10月25日(金)に開催された分科会に参加した。ご参加いただいた委員は5名(杉本委員長、内田委員、小宮山委員、西山委員、向山委員)。また、森川委員は京都府社会教育委員連絡協議会会長として、2日間ご参加いただいた。当日は、6つの分科会に分かれ、近畿2府4県が「学校・地域の連携・協働」「子育て・家庭教育支援」「地域づくり」「高齢者の生涯学習」「安心・

安全なまちづくり」「多文化共生」の各テーマについて報告・討議した。

(委員)

第5分科会「地域の暮らしを守る安心・安全な社会の構築～防災教育を通じた安心・安全なまちづくり～」に参加した。和歌山県広川町で防災教育の中心的役割を担っている「稲むらの火の館」の館長が話をされた。この館は、地域の方の募金により建てられたものであり、地域の方がこの館を通して自分たちの防災に対する教訓を継承していきたいという思いを持っておられるとのことだった。様々な人が館に見学に来るが、その展示を通して伝えたいことを自分のこととして受け止めてもらい、伝承していくことが非常に重要であると話された。そこでの取組は、子ども達が地域の人と一緒に、このような資源を利用して継承しているという特徴があった。

(委員)

第1分科会「子ども達の成長を支える学校・地域の連携協働の実践」に参加した。地域学校協働本部が平成29年に設置された滋賀県高島市が課題提起された。地域の方が学校へ入り、図書ボランティアや割り算道場等をお昼休みに実施されている。学校から地域へは大溝祭という400年続いている祭に、地域の子供達が曳山の引き手として参加しているということであった。

発表の後グループに分かれ、子どもたちのためにできることは何かを考えた。私のグループでは、ふるさとに思いを馳せふるさとを愛する人となるために地域力を上げていきたいと意見が出た。学校に地域が入っていくことについて、実際現場におられた方に意見を聞くと、「目の前の子どもで精いっぱいであり、地域の方が助けてくれるイメージがわからない。」と率直な意見をいただいた。その通りだと思った。これから自分たちが何かを進めていくには、色んなことに配慮すべきであると感じた。

(委員)

第6分科会「多様性を認め合い、多文化共生をめざす社会の実現～多文化で多彩なまちづくり・ひとづくり」に参加した。多様性を認め合うというテーマは、何十年も前から変わっておらず、それはなぜかという議論が必要である。「認め合う」から「活かす合う」へ変わっていかないといけないのではないだろうか。海外から就労等で地域に入って来られた時に、地域の人たちはどうつながっていくか。学校内における他国籍生徒の一番のフォローは、子ども達と友達になることである。どのように子ども達が人間関係を作っていくか、先生方はどのようにコーディネートしていくかが一番の課題である。

発表の内容は、地域で声掛けを行うことがその地域の多文化受け入れ態勢を築いており、また逆に、他国籍の方を受け入れることが地域の人たちをつなぐきっかけになっているというものであった。地域において多様性を認め合い、多文化共生をめざすことで、地域づくりにも活かしていくことが重要であると感じた。

(委員)

記念講演は、劇作家の平田オリザ氏で、全国で演劇を通じて人間関係を築くことを展開している方の話であった。多様性を認め合うというテーマで、異文化を理解することがいかに難しいかという話を、具体的なエピソードを交えて講演された。異文化を理解して主体的にものを考えていく姿勢を育てていかなければならないが、日本の教育で育てていくことは困難ではないかとも感じた。

シンポジウムに参加された方々は、皆色々な立場から、男女の問題や子どもと大人の問題等に関わり、どう人を育てていくかということに取り組んでいる方々であった。

記念講演やシンポジウムを通して、社会教育のテーマとして、「文化、年齢、男女の違い等を超えて、つながっていく社会をどう作るのか」が大きなテーマとなっているのだと見えた。

➤ 第37回市民スポーツまつりについて

(事務局)

令和元年10月14日(月・祝)山城総合運動公園にて開催予定だったが、当日は雨天であったため中止した。合わせて、2月23日に開催予定の宇治川マラソン大会の要項とポスターをお配りしているので、ご協力をお願いしたい。

➤ 第29回紫式部文学賞受賞作品について

➤ 第29回紫式部市民文化賞受賞作品について

(事務局)

第29回紫式部文学賞受賞作品及び第29回紫式部市民文化賞受賞作品及び選考委員特別賞受賞作品について、令和元年9月3日(水)に決定したので、ご覧置きいただきたい。

➤ 公民館の今後のあり方について～学びの仕組みを再構築するために～
(初案)について

(事務局)

公民館の今後のあり方について～学びの仕組みを再構築するために～(初案)の内容及びパブリックコメントの実施について説明した。

2. 協議事項

➤ 山城社会教育委員連絡協議会研修会における課題提起について

(事務局)

令和2年1月17日(金)南山城村文化会館で開催される山城地方社会教育委員連絡協議会研修会において、宇治市は課題提起があたっている。研修会の研究主題は「人がつながる地域づくりと社会教育の役割～市町広域連合の特色を生かしながら～」である。課題提起のタイトルを12月2日(月)までに山城教育局に報告する必要があるため、本日の会議で課題提起のタイトルと大まかな内容を決めていただきたい。

なお、課題提起は宇治市の他に城陽市と宇治田原町であるが、どちらの市町も現在取り組んでいる事業について課題提起される予定である。

(委員長)

どのような形で課題提起するか、ご意見はないか。

(事務局)

直近の当審議会では、第8期に答申を出すにあたり生涯学習の今後のビジョンを考えることを中心に様々なご意見を出していただいた。そこで、『生涯学習施設のあり方における現状と課題』というタイトルで課題提起を行い、当審議会ですべての意見が出たかについて示していきたいと思っている。

(委員長)

生涯学習審議会は、直接的な活動ではなく活動の方向性を決める会議である。前期では、公民館を中心に生涯学習施設を我々はどう捉えていくのかについて考えていただいた。このテーマは、各市町で状況に大きな違いもあるため、一つの審議内容としては面白いのではないかと。公の施設として特定の市民だけの施設となっている場合もあればカルチャーセンター化、貸館化している場合もある。そのように様々な状況があるため、一定の公益性は何かという視点を持って話が出来れば良いだろう。

発表者等の検討については、委員長、職務代理、事務局にお任せいただきたい。

➤ **今期の審議事項について**

(委員長)

今回は、私から皆さんに「自律と支援」というテーマについて提案させてもらった。今回は、もう少し焦点を絞って話したい。

Society5.0 に向けた学校 ver.3.0 では、“コミュニティソリューション”学校の課題は学校だけで解決できるものではなく、人や地域のつながりによって解決する必要があるということを出している。大学や研究機関、企業、放課後等デイサービス、地域スポーツクラブ、公民館、図書館等あらゆる社会の組織や団体が、学校教育の学びに関わっていく時代になっていると宣言したものである。

また、教師の働き方改革という大きな問題がある。文科省が教師の仕事を整理し、「基本的には学校以外が担うべき業務」「学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務」「教師の業務だが、負担軽減が可能な業務」に分け、教師の仕事を軽減させようとしている。この三つの内、前の二つは地域の人が担うべき業務ではないかと整理されている。

つまり、これからの学校教育は地域の力なくしては成り立たないということと、働き方改革の一つとして地域が関わらないといけないという事実が、必然性を持ってきている。

そんな中、3つの制度に着眼することを提案したい。

一つ目の「放課後子どもプラン」では、すべての児童に安全・安心な居場所を確保する

ため、地域の人たちが関わっていくものである。

二つ目は「総合型地域スポーツクラブ」であるが、現在、市民スポーツが広がってきたにも関わらず、スポーツをするには団体に属しないといけない。そんな中、「総合型地域スポーツクラブ」は3つの多様性（多様目・多世代・多志向）を含んでおり、様々なあり方でスポーツを楽しむことができる。学校との関係で言えば、小・中学生がスポーツをするにあたり、このような環境を作っていくことも大事であるという点である。

三つ目の「コミュニティスクール」は、文科省が進めている。これは、本来の学校のあり方だろう。地域の人たちが学校を作っていく「公」という学校の作り方である。地域の人たちが、自分の子どもとして地域の子どもの教育に関わっていく、本来の学校のあり方を目指すものである。

以上の三つが、地域が学校教育に関われる大きな制度だろう。ここを切り口に考えてみてはどうか。

（委員）

世の中がこういう形で動き出しているのは事実である。そんな中、学校と地域の関係がうまくいっていないのも事実だろう。

地域の中でも、地域の人と保護者に分かれている。保護者も地域の人なので、同じ目線に立ってほしいものである。

（委員長）

P T Aについて言えば、O Bが関わってうまくいっていることがある。それは、地域の人として関わっている。現役役員の際に地域の人であるという自覚ができるかどうかが大変ではないか。

（委員）

実際は、P T Aの役割として動いている人が多いだろう。

（委員）

最近では、P T A Cでなければいけないという意見がある。C（コミュニティ）をP T Aの人にも意識しないといけない。そこが正に地域へと意識が繋がっていく部分だろう。

（委員長）

学校を自分たちが作っている（コミュニティスクール）という感覚がない。地域の人や親が、学校を皆で一緒に作るという感覚が非常に重要である。責任を押し付け合うような対立関係ではなく、「公」という社会を作らないと全ての問題は解決しないのではないか。

（委員）

学習したことをいかに学びとして活動に変えていくかを考えた時、その成果を出してい

く場所が必要となる。放課後子どもプランやコミュニティスクールがその場となるだろう。自分の強みを活かした活躍の場所があれば、活動も長続きする。場があることで市民（地域の人）がもっと育つだろう。

（委員）

Society5.0 を見るとA Iの関わりも深くなっていくため、子どもがA Iに順応し、地域の人がついていけないということも起こり得るのではないだろうか。

（委員長）

子どもが教える教室に地域の人に来てもらう、大人の学ぶ場として学校を活用した例もある。

（委員）

土曜の居場所は 20 年ほど前から取り組んでいるが、利用児童は習い事にだんだんシフトしている。そのような場以外にも居場所があったり、家にこもったりする子どもも多く、時代に合わなくなっているかもしれない。放課後子ども教室等では、習字やそろばんを地域の人に教えてもらっていた。地域ボランティアとの連絡調整はほぼ教頭が担っているが、中には協力的な地域の人が自然と担ってくれている場合もある。

（委員）

地域ボランティアはどのくらいいるのか。

（事務局）

見守り隊や少年補導委員会、図書ボランティア等、学校には様々な形で多くの人に協力いただいている。

（委員）

ボランティアをされている人は、いくつも掛け持ちしている状況もある。

槇島地区では、土曜日の学校開放時に、午前中は門を開けておき子どもが来て遊んだり誰でも使えるようにし、午後はスポーツ少年団が使用すれば良いだろうという提案があった。また、季節ごとに実行委員会において各種団体が催しを企画されている。

多様性を認め合う世の中なので、様々な思いを持った人たちが関わることが良い。

（委員）

宇治市でなぜ放課後子どもプランが広がらなかったのかを自分なりに考えた。宇治市は既存団体がたくさんあり活動もしっかりしている。NPOや研究機関等様々な関わりが必要であるが、地域の中だけでもたくさんの活動団体があり、それらがうまく連携するに至っていない。地域の人気が気軽に参加できるような場を作らないといけない。

(委員)

地域ボランティアに関わろうとすると、地域に長くいる人とそうではない人の温度差を感じることはあると思う。自身がPTAに関わる時に、「地元で長くいなかった人の方が良い風が入ってくる。全力でサポートするのでやってほしい。」という話があった。コミュニティスクールには、地元で長くおられる高齢の方が出てくるだろう。保護者代表も出てくるだろうが、そのうち抽選で選ばれた人が出てくるという流れになりかねない。コミュニティという大元の部分をきちんと作っていくことが大切ではないか。

(委員)

コミュニティ(地域)をどう作っていくかを考えるとき、帰属意識を捉えないといけな
いだろう。

(委員長)

地域が有するアイデンティティを育てるには、シンボルが必要ではないか。それは学校
と言えないだろうか。住んでいる地域の学校を中心にコミュニティアイデンティティを育
てることが必要であり、学校はそのような役割を持っているのではないか。コミュニティ
スクールは、子どものためだけでなく地域づくりにつながっていくだろう。

無関心層を減らし学校に興味を持ってくれる人を増やすために働きかけていくことは、
社会教育であり生涯学習である。

(委員)

現代では、結婚しない人や子どものいない人も増えており、学校に関わるという意識が
生まれにくい。自身も学校で育てられたという思いから目が向けばよいが、そうならない
人たちも増えているのだろう。

(委員長)

今回のテーマを通して、地域の主体的に関われる人をどれだけ増やしていくかという事
も視野に入れ考えていけたら良い。

3. その他

➤ 京都府社会教育研究大会について

(事務局)

社会教育活動実践交流フォーラム令和元年度京都府社会教育研究大会(きょうと地域創
生府民会議協賛事業)が11月22日(金)京丹波町の和知ふれあいセンターにて開催さ
れる。なお、当日公用車でご参加いただく方は、宇治市役所議会棟前8時25分に集合し
てください。

- **最後に**

(委員長職務代理)

このような話の中から今期のテーマが決定していく。どのようなテーマに決まるのか、とても楽しみである。

<次回の会議について>

令和元年12月20日(金)午後3時00分から 生涯学習センターにて